

して 老翁 面ニ三光尉（紐白） 襟ニ浅黄 著附ニ無地熨斗目 水衣（肩上ゲ） 腰帶ニ緞子 腰蓑

尉髪 田子

後して 源融の霊 面ニ中将（紐浅黄） 襟ニ白・浅黄 著附ニ縫箔 指貫 単狩衣 腰帶ニ紋附 色鉢卷

初冠 草花扇

わき 旅僧 著附ニ無地熨斗目 結水衣 腰帶ニ緞子 角帽子 墨絵扇 数珠

間狂言 所ノ者

わき一これは諸國一見の僧にて候。我未だ都を見ず候程に。只今都へ上り候。思ひ立つ心ぞしるべ雲を分け。船路を渡り山を越え。千里も同じ一足に千里も同じ一足に。道行ニ夕べを重ね朝毎の。夕べを重ね朝毎の宿の名残も重なりて。都に早く著きにけり都に早く著きにけり

△声一して一月もはや。出潮になりて鹽竈（しおがま）の。うら寂びまさる。夕べかな。サシユ一陸奥はいづくはあれど鹽竈の。恨みて渡る老が身の。寄るべもいさや定め無き。心も澄める水の面に。照る月なみを數ふれば今宵ぞ秋の最中なる。げにや移せば鹽竈の。月も都の最中かな。秋は半ば身は已に老い重なりて諸白髪（もろしらが）。雪とのみ積りぞ来ぬる年月の。積り来ぬる年月の。春を迎へ秋を添へ。時雨（しぐ）る一松の風までも我が身の上と汲みて知る。

汐馴衣 袖寒き 浦曲（うらわ）の秋の夕べかな浦曲の秋の夕べかな。暫く休まばやと思ひ候

わき一いかに尉殿。御身は此のあたりの人にてましますか。

して一さん候（このしんが）此處（しおくみ）の汐汲（しおくみ）にて候

わき一不思議や一こは海邊（かいへん）にても無きに。汐汲とは誤りたるか尉殿

して一あら何ともなや。さて一こをばいづく（しろう）と知し召されて候ぞ

わき一さん候此處を人に問へば。六條河原の院とかや申し候よ

して一されば其の河原の院こそ鹽竈の浦候よ。陸奥の千賀の鹽竈を寫（うつ）されたる。都の内の海邊なれば。名に流れたる河原の院の。河水（かすい）をも汲め池水（ちすい）をも汲め。こゝ鹽竈の浦人ならば。汐汲など思さぬぞや

わき一げにげに陸奥の千賀の鹽竈を。都の内に寫されたるとは承り及びて候。さてあれなるは籬（まがき）が島候か

して一さん候あれこそ籬が島候よ。融（おとし）の大臣（おとど）常（みかね）は御舟を寄せられ。御酒宴（おしゆえん）の遊舞様々なりし所なり。や。月（つき）

そ出で候へ

わきへげにく月の出で候ぞや。面白やあの籬が島の森の梢に。鳥の宿し轉りて。しもんにうつる月影までも。孤舟に歸る身の上かと。思ひ出でられて候

して、只今の面前の景色を。遠き故人の心まで。お僧の御身に知らるゝとは。若しも賈島が詞やらん。鳥は宿す池中の樹

わきへ僧は敲く月下の門

して、推すも

わきへ敲くも

して、わきへ故人の心。今目前の秋暮にあり

同音へげにや古も月には千賀の鹽竈の。月には千賀の鹽竈の。浦曲の秋も半ばにて。松風も立つなりや霧の籬の島隠れ。いざ我も立渡り。昔の跡を陸奥の千賀の浦曲を眺めんや千賀の浦曲を眺めん

わきへ尚々千賀の鹽竈を。都の内に寫されたる謂はれを御物語候へ

して、語つて聞かせ申し候べし。語へ昔嵯峨の天皇の御宇に。融の大臣と申し人。陸奥の千賀の鹽竈の眺望を聞き召し及ばせ給ひ。あの難波の御津の浦よりも。日毎に潮を汲ませ。こゝにて鹽を焼かせつゝ。一生御遊の便りとし給ふ。其後には相續して甃ぶ人も無ければ。浦は其儘千汐となつて。池邊に澱む溜り水は雨の残りの古き江に。落葉散り浮く松蔭の。月だに澄まで秋の風音のみ残るばかりなり。されば歌にも。君まさで煙絶えにし鹽竈の。うら寂しくも見え渡るかなと。貫之も詠めて候

同音へげにや眺むれば。月のみ満てる鹽竈の。うら寂しくも荒れ果つる跡の世までも汐じみて。老の波も返るやらんあら昔戀しや。戀しや戀しやと慕へども願へども。かひも渚の浦千鳥音のみ鳴くばかりなり音のみ鳴くばかりなり

わきへ只今の御物語に落涙仕りて候。さて見え渡りたる山々は皆名所にて候か

して、さん候皆名所にて候。お尋ね候へ答へ申し候はん

わきへまづあれに見えたるは音羽山候か

して、さん候あれこそ音羽山候よ

わきへさては音羽山。音に聞きつゝ逢坂の。關のこたなにと詠みたれば。逢坂山も程近うこそ候らめ

して、仰の如く關のこたなにとは詠みたれども。あなたに當れば逢坂の。山は音羽の峯に隠れて。此の邊よりは

見えぬなり

わき／さて／音羽の峯續き。次第次第の山竝なみの。名所名所を語り給へ

して／語りも盡さじ言の葉の。歌の中山清閑寺せいがんじ。今熊野いまぐまのとはあれぞかし

わき／さて其の末に續きたる里一村さとひとつむらの森の木立

して／それをしるべに御覽せよ。時雨も敢へぬ秋なれば。紅葉も青きいなりやま稻荷山

わき／風も暮れ行く雲の端の梢にしるき秋の色

して／今こそ秋よ名にしおふ。春は花見し藤の森

わき／緑の空も影深き野山に續く里はいかに

して／あれこそ夕ざれば

わき／野邊の秋風

して／身に沁みて

わき／鶉うずら鳴くなる

して／深草山よ

同音／木幡山こわたやま伏見の竹田淀鳥羽も見えたりや。ハング／眺めやるそなたの空は白雲の。はや暮れそむる遠山の。峯も木深く見えたるは如何なる所なるらん

して／あれこそ大原や。小鹽の山も今日こそは。御覽じそめつらめ尚々問はせ給へや

同音／聞くにつけても秋の風。吹く方なれや峯續き西に見ゆるはいづくぞ

して／秋もはや半ば更け行く松の尾の嵐山も見えたり

同音／嵐更け行く秋の夜の。空澄身昇る月影に

して／さす潮時もはや過ぎて

同音／隙もおし照る月に賞めで

して／興に乗じて

同音／身をばげに。忘れたり秋の夜の長物語よしなや。まついざや汐を汲まんとて。持つや田子の浦東からげの汐衣。汲めば月をも袖に望汐もちしおの。汀みぎわに歸る浪の夜の。老人と見えつるが汐曇にかき紛まぎれて。跡も見えずなりにけり跡をも見せずなりにけり

待謠（わき）／礒枕（いそまくら）苔の衣を片敷きて。苔の衣を片敷きて。岩根の床（とこ）に夜もすがら。猶（なほ）も奇特を見るべしと。夢待ち顔の旅寐かな夢待ち顔の旅寐かな

出端（いでは）／忘れて年を（へ）經しものを。又古に歸る浪の。満つ鹽竈の名にしおふ。今宵の月を陸奥の。千賀の浦曲の遠き世に。其の名を残す大臣（ものおちきみ）。融（とと）の大臣（おとせ）とは我が事なり。我鹽竈に心を移し。あの籬が島の松蔭に。名月に舟を浮かめ月宮殿の白衣（はくえ）の袖も。三五夜中の新月の色。△セイ△千重降（ちえか）るや。雪を廻（めぐ）らす雲の袖

同音／さすや桂の枝々に

して／光を花と。散らすよそほひ

同音／ここにも名に立つ白河の波の。あら面白や曲水の盃。受けたり受けたり遊舞の袖

早舞（はやまひ）

ハングレあら面白（うらがへ）の遊樂（うがく）や。あら面白の遊樂（うがく）や。そも名月の其中（そのなか）に。また初月（はつづき）の宵々に。影も形も少なきは如何なる謂はれなるらん
して／それは西岫（さいしゅう）に。入日の未だ近ければ。其の影に隠さるゝ。譬（たと）へば月のある夜は星の淡（うす）きが如くなり

同音／青陽（せいよう）の春の初には

して／霞む夕べの遠山

同音／黛（まゆずみ）の色に二日月の

して／影を舟にも譬へたり

同音／又水中の遊魚（うしうぎょ）は

して／鉤（つりばち）と疑ひ

同音／雲上（うんじょう）の飛鳥（ひちやう）は

して／弓の影とも驚く

同音／一輪（いちりん）も下（くだ）らず

して／萬水（ばんすい）も上（のぼ）らず

同音／鳥は池邊の樹に宿し

して／魚は月下の浪にふ臥す

同音／聞くとも飽かじ秋の夜の

して／鳥も鳴き

同音／鐘も聞こえて

して／月もはや

同音／影傾きて明方の。雲となり雨となる。此のこおん光陰に誘はれて。月の都に入り給ふよそほひあら名残惜しの
面影や名残惜しの面影